

出雲大社の宗教行事

出雲大社では、年間に数多くの神事や宗教行事がおこなわれています。その中には、清めの儀式、お祝いの儀式、五穀豊穰の祈りなどがあります。毎年行われる神事の中には、出雲大社独自のものもあり、神道の根幹である神話とのつながりを反映しています。

大社の祭事は、1月1日の「大御饗祭」^{おおみけさい}に始まります。宮司が新年を寿ぐとともに1年の国家国民の安全と幸福と世界の平和と人類の福祉を祈願し、数多くの農作物が神々に捧げられます。

大社の最も重要な毎年恒例の祭事である「大祭礼」^{だいさいれい}は、5月中旬に3日連続でおこなわれる祭事を中心におこなわれます。天皇から贈られた供物と、五穀豊穰などを祈願する一連の神聖な行事が含まれています。また、14日の例祭では1年に一度、神職が一般的な参拝の慣習から外れる時期でもあります。2礼4拍手1礼の「4拍手」を「8拍手」に増やします。

6月1日に行われる「涼殿祭」^{りょうでんさい}は、夏の到来を告げる儀式です。神社から200メートルほど離れた近くの森へ、宮司（國造）が神を招いてお祀りをおこないます。宮司は、編まれた細長い紙をつけた大きな御幣^{ごへい}を持って、境内の東南隅にある御手洗井戸まで歩きます。宮司が歩くとき、他の神職がマコモの葉で道を覆います。参拝者はこれらの葉を家に持ち帰り、病気を予防するために玄関や神棚に飾ったりすることで、人々は無病息災を得ると古来言い伝えられています。

出雲大社で最も特徴的な神事は、旧暦の10月におこなわれます。全国的には「神無月」^{かんなづき}と呼ばれるこの時期、出雲では「神在月」^{かみありづき}と呼ばれています。日本中の数多くの神々が大社に集まり、来年の人々の関係を決定すると信じられています。集まりは、10月10日、大社の西にある稲佐の浜に到着した神々を、神職が迎えるところから始まります。11日から17日までは、神々が集まる間儀式が行われますが、その儀式は神々の審議を妨げないように静かに行われます。この間、地域の人々も活動を自粛し、静かに過ごすのが慣わしでした。最後に、17日に神々が出雲大社を出発するときと、26日に出雲地方を完全に離れるときの2回、別れの儀式が行われます。

その他、出雲大社には、宮司の独特の役割に関する儀式がいくつかあります。出雲大社の宮司家は、天照大御神の次男である天穗日命の子孫であると言われています。天穗日命は、国譲り神話に記されている合意の一環として、大国主神に永遠に仕えることになりました。新しい宮司が任命されると、宮司は天穗日命と同じ古代の道具を使って聖なる炎を灯す儀式を行い、大国主神に仕える使命を受け継ぎます。また、11月に行われる「古伝新嘗祭」^{こでんしんじょうさい}では、宮司が天地の神々と食事を

します。この儀式は、宮司の心身をよみがえらせ、それにより翌年以降も神々に仕え続けることができると言われています。

このような毎年恒例の儀式に加えて、毎朝と夕方に神々に捧げるお供え物（御日供）があります。お供え物は、米、酒、野菜、果物などで、大きな儀式ほど複雑ではありませんが、これらのお供え物は、国と皇室、そして国民の繁栄と世界の平和と人類の福祉を日々祈願するためのものです。